

## コスタリカ現地レポート 4

佐原 良祐\*

### 4-1 3C の美貌

コスタリカ，コロンビア，チリはそれぞれのアルファベットの頭文字をとって，世界の美女産出国 ”3C“ と呼ばれているらしい．首都サンホセの中心地を歩いているだけでも，活動している大学のキャンパス内を歩いているだけでも確かに美女がとても多い!! コスタリカは先住民のインディヘナ，スペイン系，アフリカ系，中国系等，多くの人種・民族がうまい具合に混ざり合って，それで美人が多くなっらしい．人により肌・目・髪色が違い，それがまたエキゾチックな雰囲気を醸し出してとても魅力的だ．その魅力を伝えるために，綺麗な女性がいたら撮影をお願いしてみた．もしこれが日本であったら知らない人に ”カワイイ” からと記念撮影を頼んでも，恐らく断れるどころか不審者扱いになる気がする．しかし，ここは陽気なラテンの国．皆フレンドリーな人なので写真撮影を頼んでも断るどころか喜んで対応してくれて，それがきっかけで仲良くなる事もでき楽しかった (図 4-1)．

もしも現地の女性と仲良くなった場合，まず両親等の家族を紹介される．日本であると，お互いの両親を紹介するのは付き合ったりしてある程度経った時や，下手すると結婚前である．けれどもコスタリカは家庭を非常に大切にするためか，女性と仲良くなって初めて遊ぶとなると，相手の家の家族旅行になぜか急に連れていかれたり，家族の食事に招かれたりする．最初はこの習慣の意味がわからなくて困惑した．なぜなら知り合っ間もない，ほぼ見ず知らずの人の家族と共に過ごさなければならないからだ．聞くところによると，この習慣は両親がどういった相手の男性と仲良くしているのかチェックするため．また「娘に変な事するなよ!」という無言のプレッシャーをかけるためもあるらしい．本当かどうかはわからないけれども...

写真 (図 4-1) の様に美女が本当に多いコスタリカ．しかし残念な事に，この美貌はあまり長くは続かないらしく，年齢が上がるに連れ体型が大きく変わってしまう事がほとんどだ．食事のためなのか，運動不足のためなのか，体質なのか原因は知らないが本当に驚くくらい変わってしまう．見た目だけの問題だけではなく，太りすぎが原因で現地ではいわゆる生活習慣病になってしまう人が非常に多いらしい．コスタリカで日本人だけのグループでいると，そこにいる周りの中年のコスタリカ女性から「日本人は皆痩せている．私も痩せるために日本に行きたい!」と冗談交じりでよく言われる．

---

\*独立行政法人国際協力機構 (JICA) 青年海外協力隊  
E-mail: takakuraken.takakuraken@gmail.com



図 4-1 コスタリカの美女達. (A) 図書館で働くジャスミンさん. (B) 博物館で研究するベアトレスさん. (C) 海で遊んでいたサンチョさん. (D) 薬局で働くナタリーさん. (E) マクドナルド店員のウェッキーさん. (F) ショップ店員のアレクサンドラさん.

#### 4-2 カリブ海

休日にカリブ海側で活動している青年海外協力隊の任地へ遊びに行かせてもらった(図 4-2). カリブ海側はジャマイカ系黒人の子孫が多く暮らし、首都や太平洋側の街とは違った雰囲気である。首都でも皆かなりのんびりしているが、田舎の人はより一層ゆっくりしていて、協力隊の友人は活動で忙しくしている時はむしろ周りに心配されるらしい。お年寄りも玄関に椅子を並べて座り一日中何もせずにはぼずっとボーっとしたり、農家は仕事が飽きたら釣りに行ったり、子供は雨が降ったら学校に行かなかったりする。頑張る事が美德とする日本人からするとこれは良くない事のように思えるが、鬱っぽくなっている人は皆無で本当に皆明るく幸せそうに日々のどかに暮らしている。

コスタリカの友人から「カリブ海は海が真っ青で透明度も高い!」と聞いて楽しみにしてビーチへ行ったが正直そんなに太平洋側と変わらなかった。やはりコスタリカの人達の情報は、基本的に間違っている。むしろ聞いた情報が合っている時が稀なくらいである。だけれども海でまったり釣りをして、目覚まし時計替わりのニワトリに起こされ、生まれたてのニワトリの卵を食べ、さらにホームステイ先の家族には温かくもてなされ、これこそ Pura Vida (純粋な人生) な休日だった。



図 4-2 のどかなカリブ海の村の風景.

#### 4-3 エピローグ

日本への帰国までの日数が近づいてきた。私は現職参加ではないので帰国してからの進路は決まっていなく、今後私がどんな職に就いて、どのように生活するかもわからない。それなので、帰国時の私は”無職で独身の28歳男性(実家住まい)”となる。これは世間一般からすると決していいイメージはないであろう笑。けれども、この2年間は日本でいわゆる普通の社会人だったら体験できない事ばかりであって、大変貴重なものになった。言葉も文化も違う国での活動はむしろうまくいかない事ばかりであったが、青年海外協力隊に参加してみて、本当に良かったと感じている。

私の現地での活動は、国際協力機構(JICA) コスタリカ支所およびマヌエル・アントニオ国立公園職員の方々に現地での調査機会を与えていただいた。そして配属先でもなんでもないコスタリカ大学動物学博物館の学芸員・学生に協力をしてもらい、遊びにも良く誘っていただいている。また日本の研究者の方にも、右も左もわからない私に様々な事を教えていただいて、活動を支えてもらっている。これらの多くの協力者の方々に感謝しながら、あと少しの間「青年海外協力隊」としての活動を頑張っていきたい。